金沢大学附属図書館医学部分館

野村 洋子*

金沢大学附属図書館医学部分館

当館は金沢市街地の高台にある金沢大学宝町キャンパスのほぼ中央に位置し、医学部医学科、附属病院、がん研究所、アイソトープ総合センター、遺伝子実験施設等にサービスを提供し、利用対象人数は2,500人を超えている。また、宝町キャンパスに隣接して、医学部保健学科があり、そこには保健学科図書室が設置されている。

現在の建物は昭和44年に竣工し、鉄筋コンクリート2階建て、4層の積層書庫からなっており（総面積1,825㎡）、蔵書冊数23万冊、所蔵雑誌種類数は約6,400タイトル、カレント受入種類数1,488タイトルである。一日平均入館者数は約400人、貸出冊数は60冊、文献複写の依頼件数4,691件、受付件数13,586件となっている（平成10年度）。このように数字で紹介をしてもイメージがわからないと思いますが、簡潔に言うと、所蔵冊数、雑誌種類数、文献複写の受付件数については医学図書館協会加盟館の平均を大きく超えているが、他は平均的な、国立の総合大学附属の医学図書館である。ご承知のように、現在国立大学は独立法人化の波に翻弄されており、よくわからないことも手伝って、この先どうなるのだろうとの不安がある。大学であれば、図書館は無くなることはないであろうが、サービスは維持できるのだろうか。いやむしろ定員法に縛られない分、人員増が可能で、サービスの幅が広がるという人も

あり、さまざまな意見や思惑が交錯している。

今、この文を書くにあたり、過去に当館を紹介した記事：「医学図書館」14巻4号（1967）〈表紙紹介〉欄（p.362）と、「日本医学図書館協会六十年略史」（1989年刊）〈加盟館の現状〉欄（p.194）を読んでみて、新たに付け加えるべきこと、当館の特色は何かと考え込んでしまった。確かに図書館をとりまく環境は、ここ十数年の間に激変し、当館も以下のように大きく変わった。図書館業務のほとんどはコンピュータ化され、画面の前にすわってデータの入力することが主な仕事となった。1999年4月、最後まで残っていた窓口業務が電算化され、OPACがインターネット版となったことで、一連の業務電算化に一区切りがついた。情報検索が冊子からオンラインを経て、ネットワークによるCD-ROM検索やインターネットのデータベース検索へと移行したことで、出版社による購読者サービスとしてのオンラインジャーナルの無料提供によって、図書館へ足を運ばずとも情報を得ることが可能となった。パート職員による、土曜開館や平日夜間の時間延長により、開館時間が大幅にのびた、等々。学生の利用者は、別になんとも思わないであろうが、昔を知っている教職員の利用者は、変化を実感しているのではないだろうか。

このような中で、我々図書館員は、流れに乗り遅れないよう、また、限られた予算の範囲内で、利用者のニーズを確認しつつ流れの中身を取捨選択しながら、その時々のでき得ることを、精一杯

*Yoko NOMURA : 〒920-8640 金沢市宝町13-1.

（1999年12月13日 受理）

やってきたつもりである。このことは、当館に限らず他の図書館も同様であろう。

混沌としていた将来の図書館像が、最近になっておぼろげながら見えてきた感がある。国立大学が大きく変わろうとしている今、もう一度図書館の原点へ立ち返り、足元を見つめ直そう。大学の設置母体がどう変わろうが、どんな形態になろうが、大学図書館は、必要とする人に必要な学術情報を提供し、研究や教育、診療を側面から支援することを使命とするところであり、動かすのは、機械ではなく人間なのだから。

日本医学図書館協会の歴史と重なる当館の歴史、医学専門学校から昇格して、金澤医科大学附属図書館として活気に満ちていたであろう大正末から昭和にかけて、国内、海外を問わず、医学雑誌を網羅的に、欠号なく収集することに徹した、また、未所蔵のものに対する利用者の要望に応えようと、相互協力の道を一步一步手探りの状態で開拓して

いった我が先輩たちの仕事に思いを馳せると、変革期の真っ只中にいる我々も新たなことに挑戦する勇気が湧いてくる。すでに満杯状態の書庫への資料の収納やオンラインジャーナルの本格導入、外国雑誌問題、24時間開館、増築や建替えなど課題は山積している。しかし、現在、雑誌バックナンバーの遡及入力作業を実施しているのであるが、それが完了し資料がデータベース化されれば、自動貸出・返却が可能となり、24時間開館の実現に一步近づくことになる。また若い館員が中心となって行っている、ホームページでのきめ細かな情報の発信が利用者に喜ばれていることなど、サービスの多様化が進展し始めている。

そう遠くない将来に、図書館の増改築や新築を実現し、本誌に紹介させていただくことができるよう、関係機関への働きかけを強めたいと思っている。